１　部局名

健康福祉学部

２　学長指定課題

ICT などを活用した評価システムの構築による臨地・臨床実習の質保証

３　事業名

OSCE に関する客観的評価システムの構築

４　事業実施代表者名

健康福祉学部長　渡辺 賢

５　事業の概要

医療職養成教育では、実際の医療現場における実践的実習が必ず実施される。医師・歯科医師・薬剤師養成課程については、全国統一基準で OSCE（Objective Structured Clinical Examination：臨床実習能力試験）や CBT（Computer Based Testing：臨床実習知識レベル試験）が行われ、合格者のみが実習に参加できが、看護師・理学療法士・作業療法士・診療放射線技師養成課程では、全国的にはこのしくみが制度化されていない。本学部看護・理学療法・作業療法・放射線学科では、12 年前より独自の OSCE が行われ、臨床実習生の質保証を試みている。しかし、①人的資源が限られ評価の客観性担保が十分ではない、②評価者・模擬患者の記憶による口頭でのフィードバックであり、適確な指導とは限らない、③学生の自己学修に十分対応できていないなど、幾つか改善の余地があると考えている。

上記問題点に対し、以下のような ICT（Information and Communication Technology)を活用し、客観的評価と効果的な指導・自己学修を実現する。

①サーバーとタブレットを用いた効率的かつ即時的な評価により、限られた時間の中で実技時間軸に沿った順序での記録や解析を可能とする。

②ネットワークカメラやウェアラブルカメラの使用により、学生の実技動線や模擬患者の視線を記録し、患者接遇の客観的評価法の質を向上する。

③動画像情報の学生への提供方法を検討し、効果的に振返って自己学修できる環境を構築する。

６　取組成果

従来、健康福祉学部全学科が各々、臨床実習前に一定の実技能力を持ってから臨床現場へ行くことを目的に紙の評価表を多数用意して OSCE としての実技評価を行ってきた。実技環境の設定をはじめ、評価表の準備・回収・採点評価は、各学科の担当教員にとって大きな負担であった。本教育改革事業により以下の成果があった。

１）評価表の電子化の完成

事前準備が必要な上、紙ベースでは統計的な解析や分析、フィードバックが困難であったが、電子化・サーバ構築することで継続的な利用が可能となった。作業療法学科では手書き記入の評価から客観的評価への変更、理学療法学科においては指定規則の変更に伴い OSCE を 3 回増やしたが、容易に順応することができた。

２）模擬患者接遇の数値化

OSCE を実施するうえで、模擬患者が必要であり、従来、非常勤講師を含む教員や上級生、ポリオ（小児まひ・急性灰白髄炎）体験者に協力を仰いでいた。本事業では、70 歳代の東京都立大学同窓生にご参加頂き、「身なり、接遇、声の大きさ、話すスピード」など、学生らに高齢患者目線で[SM1]評価頂く機会を得た。

また、電子化により紙ベースでは把握できなかった評価者・模擬患者の入力のタイミングがログとして記録できたことで、時間軸で模範的な実技動作を可視化することが可能となった。

３）フィードバック方法の提案

紙ベースの評価表では回収後、解析までに時間を有していたが、ICT を活用することで実技後、看護学科 80 名に対し、すぐに採点完了し、補習有無などフィードバックに生かすことができた。

４）kibaco を用いた CBT の構築

従来、放射線学科の CBT は OSCE の 1 項目として、数分間の医用画像に対する口頭試問であったが、本事業では、独立したオンラインでの CBT を構築できた。放射線学科 40 名が任意の時間で受講解答できた。

本事業全体の成果をはじめ、放射線学科で構築した kibaco での CBT について、作成手順を含め、FD セミナーで紹介したところ、他学科から具体的な手順について問い合わせを受けるほど、好評であった。